
仮面ライダーディケイド—悪魔とオーズと仮面ライダー—

G dian

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド―悪魔とオーズと仮面ライダー―

【Nコード】

N0776V

【作者名】

G d i a n

【あらすじ】

世界の破壊者ディケイド。

新たに現れた世界は、仮面ライダーオーズの守る「オーズ」の世界。

グリード達が欲望を解放させるこの世界で、グリードさえも恐れる存在「王」が復活する。

ディケイドとオーズ、2人のライダーが立ち向かう。

ブローグ「ケーキとくしゃみと新たな世界」

「新たな世界：出ませんねえ」

「ま、前みたいにポンポン新しい世界出ても大変だけどね。」

夏海とユウスケがコーヒーを飲みながら話す。

士は何処かへ出かけていていないようだ。

と、そこへ栄次郎がケーキを持ってくる。

「はいはいはい、おいやつですよー」

「わあ、凄いですねおじいちゃん！」

「スッゲー！！」

「あれ、士君は？」

「まだ帰って来てませんどこへ行ったんだか。」

「ガチャ」

とドアの開く音がして、士が部屋へ入ってきた。

「今日はケーキか。」

士は椅子に座ると勝手に食べ始める。

夏海とユウスケは「えー」と暫く思った後、ハッと我に返りケーキを食べ始める。

「いやー、3人とも美味しそうに食べるねえ」

「栄ちゃんのお菓子作りが上手だからよ？」

「照れるねえ」

栄次郎とキバーラが楽しそうに話している。

「クシュンッ」

夏海がくしゃみをした。

すると、ガラガラガラと新たな背景が現れた！！

「え…、新しい世界…ですか！？」

「ああ、また新しい旅が始まるみたいだな。」

「これ、なんだ？ メダル…？」

ユウスケが赤、青、緑、黄などのカラフルなメダルの絵を見ている。

「行くぞ。」

3人は写真館を出た。

第1話「お決まりと野望とクスクシエ」

「この世界での役割は…【鴻上ファウンデーション ライドベンダー 隊 門矢士】…？」

「鴻上ファウンデーションってなんだ化粧品会社かな？」

「それ、ファンデーションです…」

「とりあえず、この鴻上ファウンデーションとやらに行けば何か分りそうだな。」

3人はバイクに乗り、鴻上ファウンデーションを目指す。

・鴻上ファウンデーション・

「里中君。今日、誰か誕生日もしくは異動した者は誰だね」

「はい。今日は、誕生日の者はいません。異動者は…広報からライドベンダー隊に異動した…後藤さん、これなんて読むんですか？」

「かどや門矢 つかさ士だ。」

「門矢君か…。新たな門矢君の誕生に…ハッピーバースデー…!!」

「そりゃどうも」

社長室に士とユウスケ、夏海が入ってきた。

「キミが門矢君か。」

「アンタが鴻上光生か。初めまして…だな」

「ああ。そうだね。さあ、このケーキを」

「いらん。そのケーキ処理班に喰わせろ。」

士は親指で里中と後藤を指差した。

「門矢君。キミがこの鴻上ファウンデーションに何をしに来たかは分っているよ。それは、多国籍料理店クスクシエにある。」

「そうか。じゃあ、助かったぜ会長。」

士達は社長室を退室し、駐車場へと向かっていく。

士達の姿が見えなくなったあと、後藤が立ちあがった。

「会長！ 正直に言いますが、私はあの男をライドベンダー隊隊長ながら知りません。あの男は一体何者なんですか！？」

「知りたいという欲望。素晴らしいッ！ いいだろう後藤君。あの男は」

――鴻上ファウンデーション地下駐車場――

「なんか変な人だったな会長さん」

「そうですね。それにしても一体何の世界なんでしょうか」

「それを確かめに今からクスクシエに向かうんだろ。」

士がディケイダーに跨る。

すると、後ろから後藤が現れた。

「待て！」

「なんだ？ ケーキ処理班、班員B。」

「俺は班員Bじゃない。後藤 慎太郎だ。この世界に何をしにきた、悪魔！！」

後藤は士にバースバスターを向ける。

士は、ディケイダーから降りる。

「やれやれ。またか。もう流石に慣れてきたな。この世界に何をしに来たかは俺が知りたい。」

「この世界を破壊しに来たんだろう！ 俺が世界を守る…変身」

後藤はバーストライバーに手首の腕時計型セルメダル収納器から取り出したセルメダルを入れ、仮面ライダーバースへ変身した。

「仮面ライダー！ この世界を守ってるライダーかあれ！？」

「いや、多分そのライダーに協力してるライダーだろうな。まあ、口で言っても分らなさそうだ。力ずくで分らせてやる。変身」

『KAMENRIDE DECADE』

「一気に決めてやる！」

『BRESTCANNON』『CELLBURST』

「やれやれ。だったらこっちも変身」

『FORMRIDE DEN・O GUN』『FINALATTACKRIDE DEDEDEDEN・O』

「ギユウツ！！！！」

「てやアア！！」

2人のライダーの必殺がぶつかり合い、大きな爆発が起きる！！その衝撃でディケイドとバースが吹っ飛び、バースの変身が解ける。

「俺は、悪魔じゃない。俺を勝手に悪魔にしたてあげてんのは…」

士は変身を解き、駐車場の奥の方の柱を指差す。その柱の陰には影には鳴滝がこちらをジッと睨んでいた。

「あそこにいる、鳴滝だ。」

「そうか…。まあ、まだ信用しきった訳ではないがすまなかったな。」

「

「そんな事はどうでもいい。クスクシエに案内しろ。」

「分った着いてこい。」

後藤は近くにあった自販機にセルメダルを入れ、大きな横長なボタンを押す。

すると、そのバイクが変形しバイクへと姿を変えた。

「うお！ 変形した！！ サイドバッシャーみたいだな土ア！」

「はしゃぐな。行くぞ。」

「というか、土君クスクシエの場所知らなかったんですね。」

「俺がなんでも知ってると思ったら大間違いだ。」

4人はクスクシエへと向かう。

第2話「グリードと再びと戦闘」

―クスシエ―

ガチャツという音と共に、後藤と土達が入ってきた。

「あら、後藤くんじゃない！　いらっしやい！　あら？　お友達？」

「ええ、と…」

「そんなとこだ。…火野映司、居るか？」

士が後藤を後ろに引つ張りどかせ、知世子の前に立った。

「映司くん？　映司くんなら上にいるわよ。後藤くん、案内してくれる？　今忙しくて手が離せないの」

「あ、ハイ。分りました。こっちだ」

―映司とアंकの部屋―

「今日はヤミーもでない、いい日だな」

「ハッ。俺はつまらないがな！」

「お前はアイス食えりやいいもんな」

「あ！？」

その瞬間、アंकが後ろを振り向く。

「どうした？」

「グリード…みたいな奴が来る…!!」

「俺は何も感じないけ…。それにみたいな奴って？ 何だよそれ？」

「知るか!! 俺が知りたい!!」

アंकはアイスをガツガツ食べ、棒を捨てた。
二人とも固唾を飲み込む。

「…来るぞ」

映司はバックルを構え、アंकはメダルを映司に渡す。

ガチャッとドアが開く。

映司とアंकは立ち上がり戦闘態勢にはいる！

「火野…何をやってるんだ…？」

「ご、後藤さん…？」

「どういう事だ」

「？ …まあ、いい。それよりお前に客だ。」

「客？」

「お前が、仮面ライダーオーズか」

「か、仮面ライダー…?」

士がずかずかと部屋に入る。

コウスケと夏海は、遠慮がちに入ってくる。

「!! テメエか!! 映司! コイツだ!」

アंकが士の胸倉をつかみ、変身しろと指示する。

「この人がグリード…?」

「ああそつだ!!」

「オイ! 落ち着け二人とも!!」

後藤が二人を落ち着かせようとするが、アंकに「邪魔だ!」と突き飛ばされる。

「やれやれ。また悪魔扱いか」

「ああ!? とりあえず外引きずり出すぞ!! オイ映司!!」

「わ、分ったよ。変身!」

「タカ!トラ! バッタ! タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ!」

オーズに変身し、士を窓から連れだす。

「あゝあ。また、ですね」

「慣れすぎて、もうよくなっちゃったね。」

夏海とユウスケはのほほんと話している。

そして、知世子のところでランチをとろうということになった。

「！！ 下にヤミー……！！」

「何！？ 本当かアंक！」

「じゃあ、俺達倒してきますよ。後藤さん」

「え……ちょ……」

アंकと後藤を残し、二人は下へ降りていく。
気まずい時間が暫く流れる。

アंकは耐えられず、外へ飛び降りる。

後藤も下へ加勢しに行った。

――外――

「グリードにしては変……だな。何も感じない……」

「だから言ってるだろ？ 俺はグリードじゃないって」

「だけど、変な感じはするんだ。だから、倒させてもらっつよ……！」

トラクローを展開させ、土へ突っ込んでくる。

「はあ。やるしかないのか。変身」

『KAMEN RIDE DECADE』
『ATTACK RIDE BLAST』

「ハアッ！」

「ぐわあッ！！ ……クツ。強い…！」

恐竜の雄叫びとともに、オーズの目が一瞬紫に光る。
そして、手を地面に突っ込みメダガブリューを取り出す。

「ほう。」

『ATTACK RIDE SLASH』

「居合い斬りというか」

ディケイドはライドブッカーを刃を、
「シャアッ」と逆撫するように触る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0776v/>

仮面ライダーディケイド—悪魔とオーズと仮面ライダー—

2011年10月20日15時07分発行